

Shall We Juggle?

日本ジャグリング協会オフィシャルマガジン

No.
65

JJF



JJF2023東京特集

Japan Juggling Festival 2023

Shall We Juggle? No.65 目次



実行委員長コメント

予選講評・決勝講評

チャンピオンシップ入賞者コメント

ゲストインタビュー1：Bow

ゲストインタビュー2：石川萌

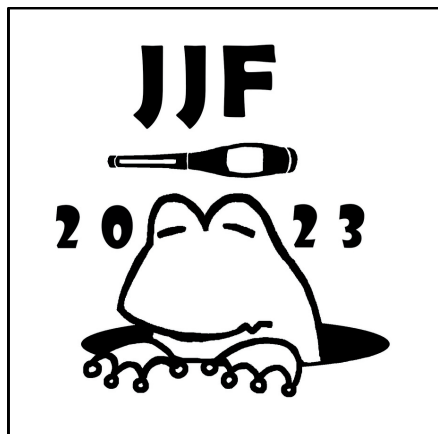
ゲストインタビュー3：長岡岳大 × めぐみ梨華 × 濱口啓介(演出)

ワークショップ一覧

イベント紹介

編集後記・奥付

JJF2023ロゴデザイン 制作：まいたけ



【制作者コメント】

ロゴデザインを担当させていただきました、まいたけです。
今回のデザインを作成するにあたって、今大会テーマとして「復興、再生、夜明け、冬眠からの目覚め」といったキーワードをいただきました。
これらのキーワードから、ラフを3案作成しました。冬眠から目覚めるカエル、水平線から昇る朝日、再生の象徴としてのクラゲの3つをモチーフにデザインを作り、検討の結果カエル案を採用していただきました。
長い冬が終わり、春が訪れてまだ眠そうに顔を出したカエル。見る人の気持ちがあふつと緩むような、そんな表情にこだわって作りました。
前回大会はモノクロのシンプルなデザインでしたが、うってかわって今年はキャラクター風になったため、果たしてグッズが売れるのだろうかという一抹の不安がありました。
結果としてたくさんのご注文をいただき、大会X(Twitter)でも、多くの方がTシャツを着てくださっているのを見て、デザイナーとしてこの大会に携われたことをとても嬉しく思いました。これからのジャグリング文化がさらに発展していくことを願っています。
ありがとうございました！



JJF2023東京特集



Japan Juggling Festival 2023(JJF2023) 開催概要

開催日時：2023年10月7日(土)～9日(月) 会場：東京都国立オリンピック記念青少年総合センター

主催：NPO法人日本ジャグリング協会

協賛：花田充、神谷梨帆、松垣元彦、ジャグリングドラゴン ヒョウガ、CREST PRECISION株式会社、劇団ほのぼののー

JJF2023 実行委員長コメント 徳川亮祐

◆自己紹介

今回、JJF2023 にて実行委員長を担当しました、徳川亮祐（とくがわりょうすけ）と申します。2008 年よりジャグリングをはじめ、現在は東京を中心に「SHOGUN」という芸名でパフォーマンスをしています。また、出演者としての活動のほかにも、ジャグリング公演のライブ配信に関する仕事もしています。

この記事では「JJF2023 が出来上がるまで」を時系列に沿って振り返り、どのような思いをもってこのイベントを作ってきたのかを記したいと思います。

◆日本ジャグリング協会と JJF 実行委員会

本題へ移る前に、「日本ジャグリング協会」と「JJF 実行委員会」の関係について説明したいと思います。

日本ジャグリング協会は、日本国内におけるジャグリングの普及・振興を目的とした NPO 法人です。

NPO 法人であるため、理事長、理事、監事からなる理事会が存在します。理事会では、協会の活動方針や、年間予算などが話し合われます。

日本ジャグリング協会は、具体的な活動として「JJF の企画・運営」、「出張ジャグリング教室の開催」、「広報誌『Shall We Juggle?』の制作・発行」などを行っています。これらの活動は、それぞれ「JJF 実行委員会」、「ジャグリング普及委員会」、「SWJ 編集部」といった組織によって運営されています。

中でも、JJF 実行委員会は最も大きな組織で、JJF の開催に合わせて毎年組閣されます。近年の JJF 実行委員会は「本部グループ」、「劇場グループ」、「イベントグループ」、「広報グループ」といった形で業務内容によって細分化されており、JJF 実行委員会全体で 10 名〜15 名のメンバーによって構成されています。

◆過去の JJF との関わり

私が初めて参加した JJF は、JJF2011 でした。会場にいるたくさんのジャグラーを見て、強く感動したことを覚えています。2016 年には、サークルの先輩に誘われる形で初めて JJF 実行委員会に参加しました。それから毎年 JJF 実行委員会には、何かしらの形で関わっています。

特に、JJF2022 では、チャンピオンシップとゲストステージを担当する「劇場グループ」のチーフを担当し、特にオンライン配信の実現に向けて尽力しました。

JJF2022 で、実行委員会の一員として活動する中で、さらに深く日本ジャグリング協会の活動に関わっていきたくて、2022 年度の理事選挙へ立候補しました。

その後、JJF2022 内で開催された総会にて当選し、2022 年度の理事に就任することとなりました。

就任後、JJF 担当理事として、JJF2023 の予算策定や実行委員会組閣のための準備を進めていきました。

当初、JJF 担当理事と JJF2023 実行委員長はそれぞれ別の人が担当する予定でしたが、残りの準備期間やメリットを総合的に検討し、私自身が JJF 担当理事と JJF2023 実行委員長を兼任することとなりました。

JJF2023 の実行委員長として、2 つのテーマを掲げました。「JJF2022 からのアップデート」と「多様なジャグリングを楽しめるイベント」の 2 つです。

◆JJF2023 で目指したテーマ 1 「JJF2022 からのアップデート」

近年の JJF は、新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、規模を縮小しながら開催されてきました。私が関わった JJF2022 では、コロナ対策を最優先事項とし、企画・運営しました。そのため、多くの苦労もありました。

2023 年に新型コロナウイルスが第 5 類へ分類されたことで、会場側の感染対策が緩和されました。そのため、JJF2023 ではより大規模なイベントを目指すことにしました。

具体的には、2019 年から 4 年ぶりとなる海外ゲストの招聘をしたり、The World Juggling Federation 主催のイベントを開催したり、など新しい挑戦をすることができました。

規模を拡大することができたのは、JJF2023 の実行委員の約半数が前年のメンバーであり、かつ会場も前年度と同じであったためだと感じます。業務内容の引き継ぎをスムーズに行うことができたおかげで実現することができました。

◆JJF2023 で目指したテーマ 2

「多様・多彩なジャグリングを楽しめるイベント」

私が好きな、ジャグリングの特徴の一つに「多彩な楽しみ方があること」があります。

JJF2023 を「多彩なジャグリングに触れられるようなイベント」にしたいと考えました。

最終的なラインナップは、日本トップクラスの技術を楽しめる「チャンピオンシップ」、国内外のゲストによる演技を楽しめる「ゲストステージ」、スポーツとしてのジャグリングを主軸においた「WJF 主催イベント」、希望者による発表会「Juggling Carnival in JJF」、ジャグリングやサーカスをコミュニケーションや協働性を育む目的で活用する「ソーシャルサーカスワークショップ」などなど。多彩なジャグリングに出会えるイベント作りをできたと考えています。

以上のようなことを考えながら、実行委員長として JJF2023 を作ってきました。

もちろん、私個人の方だけではなく、JJF2023 実行委員会、当日スタッフ、各イベントの運営チーム、日本ジャグリング協会理事、SWJ 編集部、会場スタッフなどなど、皆さんの協力のおかげで、イベントが完成しました。

そして何より、当日会場へ足を運んでくださった参加者の皆さんのおかげでもあります。

JJF2023 へ関わってくださったすべての皆さまへ、本当にありがとうございました。



JJF2023 チャンピオンシップ

決勝審査結果

決勝審査委員：矢口純（審査委員長）、八幡雄士、小澤駿弥、武俣平、松永将汰、まさやん、杉戸洋太、岩倉玲、鈴木志歩

予選審査委員：決勝審査委員、ボンバンゲー

決勝進出者

男子個人部門 ON、上田尚弥、松本耀介、鳥居岳史、岡田和也、KENTO
綿貫峻介、伊達基起、マチカネポイマワル、山本孝

女子個人部門 土居千夏、鈴木さら、石原潤

チーム部門 ケルネルズ、kikyuuiki

審査結果

男子個人部門 1位：綿貫峻介 2位：松本耀介 3位：山本孝

女子個人部門 1位：鈴木さら 2位：土居千夏 3位：石原潤

チーム部門 1位：ケルネルズ 2位：kikyuuiki

【男子個人部門】

エントリー名	審査員A	審査員B	審査員C	審査員D	審査員E	審査員F	審査員G	審査員H	審査員I	順位点合計	順位
ON										0	9
上田尚弥										0	9
松本耀介	1	2	1	2	2	1	2	3	2	70	2
鳥居岳史	5	4	3	4		3		4	4	24	4
岡田和也	4				3	5	5	5	1	24	4
KENTO					6	4	6		6	6	8
綿貫峻介	2	1	2	1	1	2	1	1		71	1
伊達基起		6	5	6					3	9	7
マチカネポイマワル	6	5	6	5	4	6	4	6	5	16	6
山本孝	3	3	4	3	5		3	2		32	3

【女子個人部門】

エントリー名	審査員A	審査員B	審査員C	審査員D	審査員E	審査員F	審査員G	審査員H	審査員I	順位点	順位
土居千夏	1	1	2	2	2	1	2	3	1	73	2
鈴木さら	2	3	1	1	1	2	1	1	3	74	1
石原潤	3	2	3	3	3	3	3	2	2	51	3

【チーム部門】

エントリー名	審査員A	審査員B	審査員C	審査員D	審査員E	審査員F	審査員G	審査員H	審査員I	順位点	順位
ケルネルズ	1	1	1	1	2	1	1	1	1	87	1
kikyuuiki	2	2	2	2	1	2	2	2	2	66	2

※1 7位以下の順位には審査点が付きません。順位点は1位から順に10、7、5、3、2、1点となります。

JJF2023CS 予選講評 鈴木志歩

今年のエントリー数は昨年を大きく上回り、ここ9年で最大の組数となりました。COVID-19の影響も残る中、多くの方が演技を作り上げてくれたことをうれしく思います。反面、例年であれば決勝進出の水準に達しているであろう演技を落選とせざるを得ない熾烈な競争となりました。審査基準が5項目同列であることと動画審査であることにより、どの項目においても大きな減点がないことが必須になってきているように思います。

今年の予選は次のように行われ、最終的に男子個人10組、女子個人3組、チーム2組が決勝進出となりました。

- (1) 各審査委員が決勝進出OKを15組選出し、一定以上のOK数を得た選手を確定
- (2) 当落線上の選手について、オンライン会議にて議論
- (3) 当落線上の選手について、部門を跨いで投票

ただし、部門間というよりは、主に部門内での評価分布が決勝進出の組数に効いた形となったことを明記しておきます。

5つの審査基準は要項に記載の通り同じ重みづけではありますが、(自明なこと) 結果としては応募者の評価分布に依存します。

まず、完成度について、ドロップやミスだけではなく、道具の軌道の乱れや足運びなどの所作の問題によって技の魅力が伝わり切らなかった例もあり、非常に惜しく感じました。予選動画の時点で技に安定感がないと、本番の完成度の期待も下がってしまいます。止まる所はしっかり止まり、きれいに歩くのが難しいけれど極力歩かない、というだけでも見栄えは良くなると思います。

難易度・希少性は強く意識されており、応募者の大半において各選手の強みが前面に押し出されていました。それにより、ある種の共通認識として、何かしら頭一つ抜けたものが期待されています。

一方、構成・エンターテインメント性については、演出面で高く評価されるような選手は限られていたこともあり、技の配置が観客の期待に沿った並び・緩急であるかどうかがボーダーとなっていました。また、道具によっては、「道具無差別の、ステージ上で行う大会であること」による相対的な見栄えが課題となっていました。後者について昨今では、ジャグリング技術が(広いステージ空間上における)視覚的な面白さに変換しきれていない場合はひと工夫が必須な状況といえます。

以上の結果として、難易度・希少性の水準が相対的に高くなる傾向にあり、かつ高い難易度は一定の希少性・エンターテインメント性を兼ね備えることから、現状では難易度の寄与度が高くなっているのではないかと考えています。現行の審査自体が集計により主観を平均化するやり方である通り、こういった考察も審査委員それぞれではあります。その上で、(決勝の傾向も加味して結果だけ見ると)見かけ上難易度に向きつけられた大会と思われてしまうことは、今年の振り返りでも議論になりました。もちろん、難易度重視の演技も非常に価値の高いもので(そして個人的には強く感動するもので)はありますが、日本におけるジャグリングの発展を「総合的に」促進し続けるために、審査基準およびその表現についても昨年に引き続き慎重に協議を重ねています。



JJF2023CS 決勝講評 矢口 純

JJFCS では予選と決勝で採点方式が異なります（詳細はHPをご参照ください）。予選は合否の○×数のみを競うため、全員から万遍なく60点を取る演技が強く、本戦は順位による傾斜が大きいため、数人からでも120点をもぎ取る演技が勝ちやすいです。予選はバント、本戦はホームラン、今後出場を考えている方は覚えて頂けると幸いです。

順位決定の前に、審査委員全員で議論を行い、各々の審査内容を修正します。今年度は、男女ともに1位2位が1点差しかない大接戦となりました。元々はもう少し点差が開いていたのですが、お互いの意見が理解できるからこそ議論後の修正で点差が縮まってしまう、9人で頭を抱えたというのが本音です。審査では、技術力だけではなくパフォーマンス性も重視されます。審査項目に照らし合わせた時、出場者ごとの強み弱みへの見解に大きな相違はありませんでしたが、重みづけが異なるため順位がバラけました。

備忘ながら、各出場者の皆様へコメントを書かせていただきます。

01 土居千夏さん…緩急と技配置を意識して綿密に作り込まれたルーチン構成に対し、JJF2018CSでの入賞に甘んじない気迫のこもったパフォーマンスでした。入場コメントにもあった「肩バタ」のバリエーションの量みかけは、確実に観客の心を掴んでいて、こちらが肩バタに取りつかれそうになりました。

02 鈴木さらさん…ボディスローへの真摯な姿勢やストイックさが伝わる演技でした。徹底的にノイズとなる要素をなくしたことがいい方向に働いたと思います。決して少なくないループ数を投げているのにも関わらず、最後の技を除きミスややり直しがなかった点も、積み上げられた技術に説得力を持たせています。

03 石橋潤さん…イチオシです。1ルーチンにこれでもかとボイの技術要素を詰め込んだ、お腹いっぱいになる演技でした。曲への合わせ方が非常に良いため、ループの継続と次への移行が心地よく、系統がバラけても煩雑にならず魅力へ繋がった点もポイントが高いです。

04 ケルネルズさん…技の最高打点が高いだけではなく、バリエーションも豊かで面白く、トップクラスの技術を持つ2人がタッグを組むと、ここまでできるのかと感じました。オブジェクト数増加に伴うリスクに対し観客に全く不安を感じさせない技量には驚きを隠せません。

05 kikyuuiki さん…2年連続決勝出場（注、これは想像を絶するほど大変です。JJFCSは目の肥えた観客ばかりで、一度見せた技はもう二度と通用しません。予選動画鑑賞を考慮すると、実質的な準備期間は半年程度で、その間に新技開発を終えなくてはなりません。今年3月期の組み替え盛り沢山の演技で多く観客を魅了しましたが、もうこれは偉業でしょう。

06 ON さん…独自の技術であるロシアンカスケード系を徹底的に極め、曲も相まって浮世離れした神々しさはまさにJJFCS。ミスが少なければ、特に最終盤（足をブラブラするあたり）を決め切っているはず、もっと観客が世界観に没入してきたと思います。個人の好みを申し上げて恐縮ですが、私のジャグラー魂を今年一番震わせてくれたのは、間違いなくONさんでした！

07 上田尚弥さん…圧倒的制御力×圧倒的技数の怒涛の演技で、3度目の予選番組にも関わらずまだまだ挑戦心を感じました。紐でディアボロを操作するという王道に忠実で、ディアボロの軌道で緩急をも表現されていたのは印象的です。惜しくもドロップの多い結果ではありましたが、それ以上に困難なルーチンに立ち向かう覚悟に心動かされました。

08 松本耀介さん…面白さ、わかりやすさ、マニアックさを併せ持ったループ技およびトランジションで構成された、誰の目から見ても「上手い」ポールジャグリングで、1番観客の心を掴んでいたと思います。上手いは自由で、自由は楽しいということに、改めて気付かされました。今後、多くのジャグラーの目標となることを期待します。

09 鳥居岳史さん…身体の動きは本番の緊張にも屈せず伸びやか、技は想像を超えた動きのあるものばかりで、大舞台に相応しいエンターテインメントでした。なお、予選にはなかった技がいくつも見られました。現行の判断では減点等はなく、特に3ディアラストの背中を通す技は狂

喜乱舞ものでしたが、いつ審査基準解釈の変更があってもおかしくないので、本戦での大幅な技変更はお勧めしません……！

10 岡田和也さん…緻かな曲選択、予想を超えた手数のコンプ、合間の巧妙なシーケンスと、如何にデビルスティックが上手いかとのプレゼンに抜かりがなく、JJFCSのお手本のような演技でした。特に、デュアルの技密度で盛り上がりを出していた点が印象的でした。また、3センタースティックをJJFCSの舞台で披露されたことは、日本のデビルスティックのスタンダードを引き上げる功績があったと思います。

11 KENTO さん…JJFCS特有の技術の応酬の中、一挙一動に魅了され文字通り息を呑みパフォーマンスを見せていただきました。もちろん、それができたのは、JJFCSに相応しい技術があったからこそだと思います。冒頭のおひきは笑いで観客を和ませ、会場の空気を一気にKENTOさん一色にすることで、コンタクトジャグリングを大きく見せる役割を果たしていたと思います（予選ではそこまで汲み取れず動画審査の難しさを感じました）。

12 綿貫俊介さん…ほとんどディアボロの回転を止めず、超高難易度で超マニアックなトリックをこれでもかと詰め込んだ、こだわりを感じる演技でした。3分近い3,4ディアパートは一度のドロップも許されない緊張感があり、4ディアの多段階までやり切ったときの感動はひとしおです。合間で観客の歓声が漏れ出ることで空気と間が整うため、去年や一昨年には成り立たなかった鑑賞体験かもしれません。

13 伊達基起さん…クラブの理解度が高いため魅力的なシーケンスがいつまでも続き、それだけでパフォーマンスとして成立していました。卓越したセンスと手札の多さがなければ組み上げられない構成で、JJFCSの場で多くのジャグラーの目に触れたことは価値のあることだったと思います。

14 マチカネボイマワルさん…スイングだけでも勝負できそうな地力がありますが、特に紐同士を干渉させる系統にはエポックメイキングな技が多数見られました。複雑な道具操作の技が多いにも関わらず、咀嚼しやすくして直感的に楽しめる演技でしたが、おそらく裏ではかなりの技の取舍選択をしてきたと思います。元の演技の完成度が高く、魅力的な技の濃度が高いため、アドリブを混ぜない方がより演技に没入してきたかと思います。

15 山本孝さん…ずっと本選で見たかった演技です。1,2,3ディア全てのパートで世界トップクラスの技術力が見られました。どの技も斬新ながら軌道美がありリスクの高さが分かりやすいため、どこを切り取っても驚きが盛り込まれていて、JJFCSらしさを感じました。

皆さん本当に素晴らしい演技でした。これから我々審査委員の頭を悩ませてください。

（編集部注：SWJの発行が遅れた結果、kikyuuikiはJJF2024の決勝進出に伴い3年連続決勝出場となりました。）

CS 入賞者コメント

女子個人部門 金賞 鈴木さら



本番ではほぼパーフェクトと言って良いほど満足のいく演技ができたこと、そして、1位を頂けたことを非常に嬉しく思っています。思い返せば、高校1年生でジャグリングを始めた当時、JJFCSは憧れの舞台というよりはむしろ別世界でした。いつの間にか、上手いジャグラー達と揉まれながら、遠くまで来てしまったものです。

今回のルーチンは、ネック、サイド、ショルダー系統の技で構成しました。特に、1曲目後半〜2曲目は、思い入れの強い技・シークエンスばかりです。ずっと憧れてきた怒涛のボディスローコンボを自分なりの形で実現できた点で一つの到達点になりました。

自分一人ではこの舞台に立つことはなかったと思います。ここに至るまで様々な場面で応援してくださった皆様に感謝しています。本当にありがとうございました。またお会いしましょう。

女子個人部門 銀賞 土居千夏



準優勝でした。去年の7月から「難易度を前回よりとにかく上げつつ、如何に構成で減点させないようにするか、如何にドロップを減らすか」をずっと試行錯誤してルーチンを作ってきました。努力してきた成果を舞台上で最大限出して勝ち取った銀メダルなのでとても嬉しく思います。悔しい気持ちもなくはないですが、それよりも魅力を持っている出場者たちと戦ってここまでよく頑張ったなという気持ちが大きいです。

JJF2019CSが台風で中止になってから3年ほど体調を崩し、CSに出たいと思いつつも頭や体が全然ついていけず断念し続けていました。コロナ禍が落ち着いて体調も少し回復した頃、面白いジャグリングやジャグリングを頑張る人たちの姿を見て元気を取り戻し、CSを目指そうと思い頑張ってきました。

今回のルーチンの事を思うという人々の顔が思い浮かぶくらい沢山の人にお世話になりました。

まず、マラバリストのファイナリストたちには練習を共にしたりCSの話をしたりしてメンタル面で支えられました。

また、マラバリストの他の子達や学生時代からの先輩・後輩ジャグラーもルーチンを見てくれたり相談に乗ってくれたりしました。本当にありがとうございました。

今後は技術も構成も所作もまだまだ発展途上の部分が多く研究のしかけがあるので、引き続き頑張っていこうと思います。上手くなっていつかまたCSに挑戦出来たらと思いますので、是非勝負しましょう。

女子個人部門 銅賞 石原潤

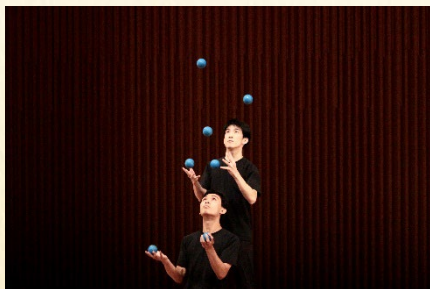


はじめに、JJFCSという素晴らしい舞台を用意してくださった運営の方々に、心より感謝申し上げます。運営の皆様のおかげで、最高の経験をする事ができました。

今回のルーチンは、せっかく JJF というあの憧れの舞台に立つのならとにかく自分が好きなものを詰め込もう、という気持ちで作りしました。外部の大会でのパフォーマンスの経験がなく、自分の演技を観たときの観客の反応がわからないという不安要素が大きかったため、観客が飽きないよう技の密度・目新しさを特に意識しました。本番は想像以上にジャグリングがしやすい雰囲気、これが JJF かと感動しながら楽しんで演技することができました。

最後に、JJFCSの舞台に立つまでに関わった多くの方々に感謝の気持ちを伝えたいです。ルーチンを作るにあたりたくさんのアドバイスをくれた方、動画撮影や通し練をずっと見守ってくれた方々、予選通過が発表された後や本番前に応援のメッセージをくれた方々、当日舞台裏で声をかけてくれた演者の方々、そして何より代々木の舞台まで応援しに来てくれた方々、その全てが私にとって非常に嬉しく忘れられないものとなりました。本当にありがとうございました。

チーム部門 金賞 ケルネルズ



アイデアを練り、無駄な部分を削ってルーチンを作りました。「練る・削る」を並び替えて「ケルネルズ」です。嘘です。田んぼの名前からつけました。

技の開発やルーチン練、予選練習など大変な事も多かったですが、大舞台で練習の成果を出す事が出来て良かったです。

最後になりますが、応援してくださった方々、運営の方々、筑駒jugglersOBの方々、村田さんありがとうございました。(眞岡佳樹)

振り付けや空えめに技にこだわりをもって練習をしてきたので、本番の舞台で見せたいものを見せられたことが何より満足でした。予選練習期間はノードロを目指してかなりハードに練習を重ねましたが、その量にこだわった練習が自信にもつながり良い方向に働いたのだと思います。また練習にあたってひろおを含め大変多くの方にアドバイスや練習環境などお世話になりました。今後もひっそりとジャグリングを続けていると思うので引き続きよろしくお願いします。(村田啓人)

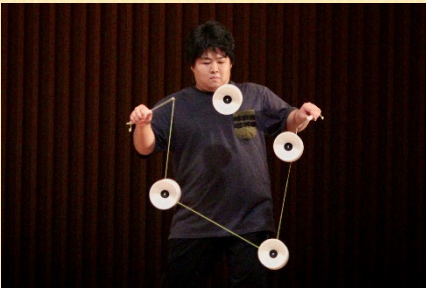
チーム部門 銀賞 kikyuuiki



JJF2022の練習中に生まれた「机分離してもいろんな技作れそう!」というメンバーの気づきと、JJF2022を見た友人からもらった「kikyuuikiは3次元的な動きへの意識が強いね!」というコメントから、「机・椅子・ボールの演目、まだまだ広がりがあるかも!」とモチベーションが湧き、演目を作成しました。テーマは「ボールが転がるゾーンの拡張と変形」です。机のさまざまな状態(分離・連結・組み上げ・斜面)で技を大量に作成することから始めたのですが、今まで以上にさまざまなパターンを作れるのが楽しくて、予選動画撮影直前まで技を作っていました。今回演目に組み込めなかった技もあるので、ブラッシュアップしてどこかで出したいです。

机・椅子・ボールでの演目にはまだまだ可能性を感じつつ、CSに適したボリューム感・内容で出すのはちょっと難しくなってきたかなとも感じています。今度CSに出すときがあれば、違う道具の組み合わせを探って披露できればと思います。連覇できなかったことそれ自体は悔しいですが、JJF2022から発展させた演目を作れたこと、それをしっかり本番で実現できたことに満足しています。ありがとうございました!

男子個人部門 金賞 綿貫峻介



※コメント辞退の意向がありましたことをお伝えいたします。

(SWJ 編集部)

男子個人部門 銀賞 松本耀介



僕は高校1年生の冬にジャグリングを始めましたが、その出会いは全くの偶然によるものでした。高校ではジャグリングの部活やサークルがあったわけではなく、僕は登山部に所属していました。その部活の同期の男が何を思ったか突然ジャグリングを始め、それに影響される形で僕も練習するようになりました。初めは丸くなった消しゴムとガシャポンの入れ物を現長って捌けていたことを今でも覚えています。

それから約12年間、毎日ボールを捌き続けてきました。最近になってようやく自分のやりたいジャグリングが形になってきたと感じています。良い技、綺麗な技、好きな技をたくさん見つけることができました。今回のチャンピオンシップで行ったルーチンでは、そんなお気に入りの技たちをこれでもかと詰め込みました。その結果、ルーチン中の技密度がかなり高くなってしまい、予選動画の撮影や通し練習にかなり苦労することになりました。しかし、本番では見せたかった技をしっかりと見せることができ、自分ではかなり満足のいく演技ができたと思っています。最後の技を決めた瞬間の大きな歓声と客席に座る人々の顔は生涯忘れることはないでしょう。

自分自身、偶然始めたこの趣味をこんなに長く深く続けることになるとは思っていませんでした。今回で一つの大きな目標を達成することはできましたが、ジャグリングはまだまだ続けていくつもりです。次はどんな技が見つかるかな?

男子個人部門 銅賞 山本孝



今回のルーチンは今までで一番練習した思い入れのあるものだったので、3位入賞という結果をいただけて本当に嬉しかったです。

2022年の予選にも今年と同じルーチンを出していたのですが、ミスの少ないものを提出することができずに落選となってしまいました。当時かなり落ち込みましたが、審査員の方々からのコメントを読んで、ミスをなくせば予選通過できるだろうという自信が生まれ、1年間練習を続けることができました。また練習が上手いはずなのに苦しい時期もありましたが、周りの人達に支えられ、このような結果をいただけたと思います。

最後になりますが、今年もJJFを開催してくださった関係者の皆様、普段から一緒に練習してくれたマラバリストやディアボロプレイヤーの方々、高校で一緒にジャグリング同好会を立ち上げてくれた同期、後輩、先生、あらゆる面で支えてくれた家族に、この場をお借りしてお礼申し上げます。本当にありがとうございました。



ゲストインタビュー1

Bow

Bow（ボウ）は、フランス生まれ、現在ドイツ・ベルリンに拠点を置くポイジャグラー。自身のアート表現の核としてボールに魅力を感じ、またその領域を広げるものとしてヒモを位置付ける。さまざまに異なる種類のヒモを用いつつ、それがボールにつながっていることによって、あるいはヒモそのものの性質によって生み出される、新たな見た目やコンセプトを模索中。従来のボール、クラブ、リングジャグリングを踏襲し、それを昇華するジャグリングの次の一步を研究している。

ゲストステージについて

まずは昨日のゲストステージ、ありがとうございました。ゲストステージを終えた感想をお聞かせください。

とても楽しかったです。今までビデオで何度も見たことのあった舞台について立つことができ、そのパフォーマンスを生で見られたことも。感動したとすら言ってもいいかもしれない。

演技の中で思い通りに行かなかった部分が少しだけあって残念でしたが、全体としてはとても楽しくパフォーマンスができました。いい経験でした。

今回の演技を作るにあたってこだわった部分はありますか。

今回披露したのは、今も創作真っ最中の2,30分ほどのショーの一部なんです。その内容を切り取って見せるにあたって気を配ったのは、ジャグリングをする人でも興味を持ってもらえそうな部分を持ってきたこと、そしてポイが、サーカスやジャグリングといった文脈だけではなくて、一般的にも人気を得てきているという状況に合わせようと思ったということ。その中で、今までのポイの歴史の中で積み上げてきた技術を必ずしも見せる必要はない、ということですね。

ショーを見に行くと、例えばクラブジャグリングを見るときは、ジャグラーであるにせよ、そうでないにせよ、何かしらのイメージがありますよね。クラブらしい動き、というものもある程度想像がつく。ボールでも同じです。ボールを見た時に何か先入観があるわけです。でも同時にボールはとても中立的な形だから、色々なものに見立てることもできる。

でもポイというのはとても変な形です。ボールからロープが伸びていて、もう一方の端には、小さいノブがついている。今回の演目の要点は、それぞれの要素の価値を一個一個きちんと表現する、ということです。なぜボールだけではないのか。ボールにロープがついている、ということがどういうことなのか。それをプレゼンテーションする意識で作りました。

もっと単純にいうと、僕が舞台上でやったのはこういうことです。ここにポイがあります、と。こんな物体がありますという事実があって、観客がそれを扱うジャグラーを見て、まずは「うん、こういう物体を使っているな」という印象が最初にあるんだけど、最終的に、「ああ、だからこの形なんだ」「だからロープが必要なんだ」「だから持ち手が必要なんだ」というふうに、ポイという物体を構成する、それぞれの要素に焦点を当てたかった。それを僕が見て、感じているそのままに表現したいと思いました。



Bow とポイ

Bow さんが思う、ポイを投げるということの魅力について教えてください。

僕は8年間ぐらいディアボロをやっていました。真剣にポイをやり始める前の話です。

その時点で、おそらく僕は慣性を使った道具の操作、ということに関心があったんだと思います。連続した慣性をキープする、その慣性と僕自身の関係性というもの、あとはロープという概念ですよね。それに関心があった。

僕は胡亂に意識的にポイを選んだわけじゃないんです。ポイもトライしてみようかな、というぐらいの軽い気持ちです。その時点で、すでにボールやクラブ等ほとんどのジャグリングをやったことはありました。でもポイだけはまだ試したことが無かったもので、試してみたらとても気に入った、という感じですね。

今になって振り返ってみると、まあそれも納得できるなど。ポイもディアボロも、ロープがあって物体を操作する、という点で似通っているんだなと思います。

そのあとで何があったかというと、ディアボロにはものすごくハマっていたんだけど、ある時点で興味を失って、もういいかなと思ったんです。ポイに魅力を感じたのはなぜかというと、ポイにはボールがついていて、それがすごくシンプルだからです。より自分との繋がりをを感じる。でも同時にロープにも魅力を感じている部分もあるから、ポイというのはその中間としてとても優れているんです。ロープを使ってもいいし、ボールを使ってもいいし。

ポイだと、ボールを掴んでしまえばロープを無視するということもできるし、どちらにもなれる。だからボールとロープという物の間をとる上で、最適な道具なんですよ。

昨日のWSもゲストステージでも、Cyrille Humen (シリル・ユマン) からインスピレーションを受けていると感じました。影響を受けたパフォーマーがいれば教えてください。

Cyrille Humen の名前が出てきたのはいいことですね、素晴らしいジャグラーだから。ポイの世界でも、ジャグリングの世界でも、重要な人だと思う。

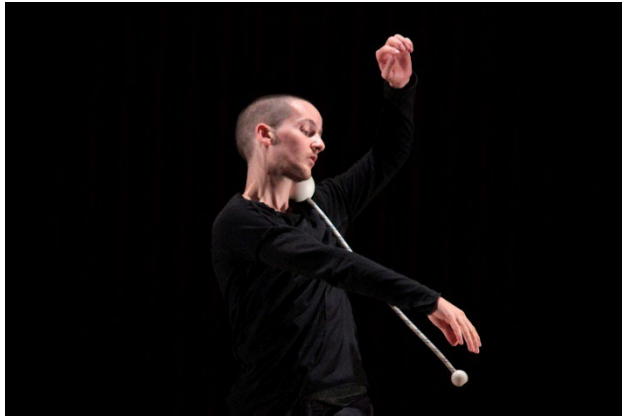
僕も彼の影響を受けたよ、と言いたいところではあるんだけど、でも残念なことに最初の時点では、彼は特に印象に残らなかった。あとになってから「ああ、この人は上手いや」って分かったんです。

基本的に僕がパイジャグリングを練習してきた中では、ボールジャグラーを参

考にしてきました。特に、メインのインスピレーションになっていて、かつ今でも先生なのが Stefan Sing (ステファン・シング)、Liam Wilson (リアム・ウィルソン) です。

Cyrille のビデオはとても早い時期から見ていて好きだったのだけど、僕にとってはまだ理解できなかった、っていう感じ。ちょっと早すぎた。つい2、3年前にようやくビデオを見返していて、ああ、これは参考になるなと理解でき始めました。自分自身が成長して、彼がどういう風に良いのか、という事が分かるようになってきた感じです。

Cyrille からの影響は、かなり後になってから受けたという感じ。だから Stefan Sing がここ数年では一番影響を受けたジャグラーですね。あの人は、ジャグリングというものに関してとても幅広い理解をしていて、ジャグリングのコアの部分を分かっている。



ポイは、得てしてずっと回し続けたり、どこで始まってどこで終わったのかよく分からないような Flow の方向に行きがちです。ずっと動き続ける、ある形を表現する、とか。でも Stefan Sing は、ボールで全く逆のことをやるんですね。どこで始まり、どこで終わるかということをしっかり一つ一つを明確なアプローチにしているので、自分としてはそれをかなり取り入れています。

彼は自分自身の次元をもっているので、自分のキャンバスに絵を描くようなイメージでアプローチするということに影響を受けています。だから、実は Flow だけに絞らないことで、Flow がより良く見えるようになるんですよ。より広く深い理解をしていて、ペインティングをするための色々な方法を知っていれば、Flow も一つのいい方法ではあるんです。しかし、Flow だけを使っているとつまらなくなっちゃうんですよ。ちょっとの間だけやるならいいですけどね。

例えば水の流れとか、ずっと見続けられないじゃないですか。ずっと見ていたらどっかで寝ちゃうし。まあそれはそれでいいものですけど。

Flow という流れていく部分があった上で、ピタッと止まったりホールドするだけというような、動きを際立たせる要素を分割して考えられれば、結果的に Flow がより良く見えると思うんですよ。Flow 以外にも自分好みにペイントする技術を持つことでいいですね。

僕にとって同様の事がポイでも実現可能か、ということが面白い挑戦でした。ロープは動きをピタッと止めたり、再び動かしたりという区別をはっきり出すのが難しい道具なんですよ。僕の体が止まっても、ロープはぶらぶらしてポイは動いちゃうから。そういう所をどう解決していくかが面白かった。

普段どれぐらいの時間、こういった練習をしていますか。

僕の練習のしかたは、期間ごとに変わってきていて、ディアボロをやっていた頃はウルトラランニング（長距離走）や、畑をやっていたりしたので、結構まばらな感じでした。その合間にジャグリングをやっていたので、僕が14歳から17歳位までの最初の頃は、1日1~2時間ぐらいでしたね。

18歳になった時に、「よし、ジャグリングでいこう」って思ったんですよ。一つのことに集中しよう、って。それから3年間はちょっとやりすぎかな、っていうくらいやっていました。

幸運なこと、ユースサーカスでジャグリングができて、その練習場の鍵をもらえたんですよ。その頃は、1日16時間位やっていました。8時に起きて、9時頃から練習開始して、深夜12時までずっと練習していました。食事は一日一回だけでちょっと張り切りすぎていて、それは健康的とは言えなかったと思うんですけど（笑）。その頃はポイだけでなく、ボールジャグリングもディアボロもやっていましたね。

ここ2年くらいは、夏は一日6~7時間で、冬は10~12時間ぐらいやりますね。夏は暑いので少ない時間で集中して練習します。最初からギアを上げて一気にト

ップまで持っていく感じでパツと練習しますね。短時間集中。冬はもうちょっと探り探りやる感じで。

最近、なるべく毎週日曜日は気楽な練習をするようにしています。一緒に暮らしているパートナーが、「毎日練習ばっかりしていたら不健康だ。一日くらい休みなさい」と言うので、パートナーと一緒に外を散歩しながらジャグリングをするようになりました。まあ、これが僕にとっての気楽な練習です（笑）。

ということは基本的には毎日練習するということですね。

そうですね。日曜だけはあまり考えずにジャグリングしていますね。

今使っている道具について教えてください。

自作のポイですが、ボールは NetJuggler というフランスのジャグリング道具会社の ézoé（エオゾエ）というボールを使っています。その会社の社長が友人でもあって、たくさんのステージボールを安く譲ってもらえて、いろんな組み合わせを実験できたんです。

それ以外の部分についてはたくさん時間をかけて、いろんなロープを試してきました。最初の頃は、スポーツ用品店で買うような全然良くないものを使っていましたね。かなりの時間を、あまり良くないロープを使ったポイで練習していました。でもここ2年くらいは、良いロープを見つけました。断然いいんですよ。僕にとってロープに必要な要件というのが、マニピュレーションをするときに形を保持してくれるということです。信頼性のあるロープがいいんです。自分がマニピュレーションをする時に、どういう風に動かすかということが正確に分かるのがいいんです。空中にある時にも、形を保ってくれる方が見た目にも綺麗ですしね。一定の動きをしてくれるロープがいい。

実は、今僕が使うロープを選んだ理由が、ジャグリングしやすいからだと思っている人が多いんですけど、そういうことじゃなくて。ジャグリングすること自体は、ゴムみたいに伸びちゃうんじゃないかな大丈夫です（笑）。

僕にとっては、ビジュアルが整って見えて綺麗だから、というのが理由です。



ヘッドは結構小さいものを使っていますよね。

90mm ですね。最初の3年ぐらいはNetJuggler社の100mmを使っていました。ヨーロッパではそれが普通なんですが、僕は180gの軽いバージョンを使っていました。

ポイスピナーの多くは200gを使っていることが多いですが、僕にとって200gは3,4ポイをやるとなった時に重すぎました。その後、Chris Kelly (クリス・ケリー) という人とコラボレーションをするようになって、95mmのポイを使うようになりました。彼はいろんな面白い色のもも選べるようなポイを作っていたんですけど、色々個人的な事情があって、それぞれ違う道を行くことになって、続かなかったんですけどね。それとポイ自体の問題もあって、サイズは良かったんですけど、まだ重いな、という感触がありました。180gよりももう少し軽い方がいいなと思って。

それから、Net JugglerのMatthewが売っている90mmを使い始めました。本音を言うとビジュアル的には、僕の好みからするとやや小さいかなと言う感じはあるんですが170gだったんですね。それを試してみたら、6ポイも今までよりスムーズに挑戦できるようになったし、5ポイをやる時も疲れが減ったんですよね。なので、最初はその大きさの変化に慣れるのが大変でしたけど、結果的にはそこまで小さくなりました。



JJFについて

チャンピオンシップの感想をお聞かせください。

チャンピオンシップのフォーマットというか、その考え方は、ヨーロッパの人間である僕からしたら違和感のあるものです。

でも、僕は今回チャンピオンシップを見られたのがとても嬉しかった。なぜかという、チャンピオンシップというものが、いかにジャグリングの世界に価値をもたらしているか、ということが感じられたからですね。

ある意味ではとても健康的なものだと思うし、感動しました。フォーマットのには、真剣勝負で、枠組みがあって、ルールがきっちり決められていて、その上で競技に参加している人たちのジャグリングへの愛が感じられて、そこに感動しました。

ヨーロッパでは、ジャグリングへの愛というものがそこまでクリアに見えることが稀です。日本のチャンピオンシップではそれがはっきりと見えた感じがしました。第一印象では、とても厳かでルールに縛られているものという印象だったにもかかわらずです。

僕はビデオを含めてジャグリングをたくさん見ます。イノベティブな事とか、すごく難しいジャグリングを見ている面白んですけど、僕が一番好きで見たいのは「この人は本当にジャグリングが好きなんだな」と伝わってくるよう

なジャグリングです。その技自体が自分の好みではないにしても、そういうことが伝わってきたら自分にとっては面白いと思います。

印象に残ったプレイヤーはいますか。

みんな印象には残りましたが、そうですね、男子個人で優勝した綿貫峻介さんの演技も良かったし、デビルスティックの岡田和也さんの演技にも感動しました。

でもちょっとそれとは違う理由で、女子部門でポイをやった石原潤さん、僕にとってとても印象的で感動しました。でも、みんなですね。JJFに参加している人たちを見て、感銘を受けました。自分が思っているほどコミュニケーションできないのは歯痒いけど。まあ、日本語を勉強しようかな (笑)

こちら英語を頑張ります (笑)。

おわりに

今後の展望についてお願いします。

今後の展望は.....ただ、ジャグリングし続けることですね。

いや、本当に。僕の人生の設計というのは至極シンプルで、ジャグリングのあるいい人生を歩む、ということだけなんです。ジャグリングができて、楽しく過ごせて、大好きな人たちが周りにいるってことが一番。好きな人と一緒にいることがジャグリングにもいい影響を与えるし。それぐらいシンプルな感じで僕は行きたいと思っています。

ライフワークってことですね。最後にコメントはありますか。

(青木) なんでもいいよ、日本のジャグラーへの一言でも、好きな食べ物でも。いなり寿司! あとは納豆も、好き...かも?ものによるけど (笑)。

ぜひ色々試してみてください (笑)。

そうそう、好きになれそうなんだけど、何回か試さないと美味しく食べられないタイプの食べ物なんだよね (笑)。

ありがとうございました。



インタビュアー：おかっしー (右)

通訳・解説：青木直哉 (左)

ゲストインタビュー2

石川萌

バトントワーリング発展の可能性を日々模索し、国内外を問わずイベントや講習会においてバトンの魅力を伝え、後進の育成に努めている。

全日本選手権では4度のグランプリを獲得し、世界選手権においても2大会連続優勝の偉業を成し遂げ、2019年に現役を引退。そして2023年、4年ぶりに現役復活を決意し、教員の傍ら、3月の全日本選手権で優勝。イギリスで行われる世界選手権の切符を手にする。

今回は複数本のバトンを活かしたフリースタイル演技をお楽しみ下さい。



ゲストステージについて

まゆこ (以下、ま)：まずは、ゲストステージを終えた感想をお聞かせください。

石川 (以下、石)：とてもいい雰囲気でパフォーマンスさせてもらいました。踊っている間、僕がここで演技してもいいんだという存在意義を歓声で思い知らされたというか。個人的には居心地が良かったです。

ま：皆さん、最初から大盛り上がりでしたね。普段はジャグラーに対してあまり演技を見せる機会がないと思いますが、ジャグラー特有の反応はありましたか？

石：独特というのか……。海外のバトンの大会に近いなとすごく感じまして。例えば日本のバトンの大会はどちらかというと拍手だけで終わるほうが多いですね。演技しているときの反応で、難易度がわかっている歓声を聞くと、「理解してくれているんだ」「嬉しいな」という気持ちになるし。僕はすごく温かくていい反応だなと感じました。

ま：ジャグラーは思わず歓声が漏れちゃう人が多いので (笑)。

石：多いですね (笑)。海外の人はすごく歓声を出すので、やっぱり技が決まったときはワー！となります。海外の大会を想起しました。

ま：今回の演技のテーマや意識したポイントを教えてください。

石：すごい恥ずかしいな (笑)。

ア：ゲストステージを見た人は、そういう話を伝えてもらえると、気付きがあると思います。

石：岡本晃樹さん (注1) の構成演出論ワークショップを受けていたんですけど、すごく面白くて。僕自身もいろんなことへ問題意識を持ってテーマにして作品を作りたいと思っている人間なんですけど。今回は、僕がどうこうというよりも、見てくださるお客さんにどう反応してもらうかを意識して作った作品でした。例えば、バトンの大会ではいろんな技術が途切れることなく演技することが評価される対象になって、同じ技の繰り返しをしないんですね。バトンを首の上で回すネックロールも、腕を上げて首の上で回しながらやるモンスターロールも、あんなにやなくていいんです。だけど、僕のジャグリングのイメージでいうと、繰り返しやることに意味があったりとか、難しさを感じる部分があることを知っていたので、そしたら見ている人は喜んでもらえたりするのかな？と。なのですごく恥ずかしいです (笑)。本当はもっとテーマを持って演技したいところもあったんですけど、今回は観客もジャグラーがほとんどだと思うので、そこに焦点を当てたような感じですね。

ア：トップバッターはいかがでしたか？

石：演技前はラッキーでしたね。一番というのが好きなんです。一番は、悪い方向で考えると基準になってしまうんですけど、いい方向では自分の雰囲気を作れるし、すごく良かったなと思います。

ア：ステージの感じや、舞台上はいかがでしたか？

石：舞台裏はすごく温かかったです。スタッフさんの調整も含めて、僕がこういう風にしたいと言ったことに対して、すぐできる限り行動してくれて、やりやすかったです。もちろん、バトンの性質上、天井の高さとかもいろいろあるので、元々予定していた技をかなりレベルも落としています。実際に会場へ来てみて調整したりとか、本番直前で変えた技もあったりとか。なんなら演技しているときに、やめようとなった技もあったりとか。その都度リカバリーはいろいろあったんですけど、演技する側が考えないといけないこと、使命だと思っているので、楽しんで演技できたと思っています。

ア：ミスがない演技というのは、観ていてすごいなと思ったんですけど、そこにこだわりはありますか？

石：大それたことは言えないんですけど (笑)、今年の8月に開催された「IBTF 世界バトントワーリング選手権大会」で、スリーバトンの男子シニア部門決勝をノーミスで演技して優勝できたんですよ。なぜミスがなくなってきたのかの理由は、練習でも落とさないために考えたからだと思います。それはジャグラーの皆さんも一緒だと思うんですね。僕自身、どういう風に練習したら自分の性質に合っていて、自分が気持ちよく練習を終えられるか、をすごく考えます。究極は、考えていたら感覚になるなと感じたんですよ。それを世界大会前に気付いてよかったなと思っています。

例えば、3本のバトンを使っていると「バトンがあっちに飛んでいったから、次はこうやってリカバリーしないといけない」「落とさないために変えないといけない」という、その場の判断が多くあるんですね。でも、ある日考えることに疲れたなと思って。でもふと、これだけ練習してきたんだから、自分の身体自身はもう考えなくても勝手に動いてくれるだろう、自分の身体を信じてみよう、みたいな感覚になったんですね。バトンと対等というか、バトンの声を聴きながらというか、ちょっと変な感覚ですけど。そうしたら、すごく楽になったんですね。世界大会もそういう気持ちで臨めて。予選は1本ミスしちゃったんですが、決勝では本当にミスがなく演技できた。今回のゲストステージも本番前にすごく緊張してたんですけど、なるようになるし身体に任せようと思って。そうしたら、実際にやろうとした技も「このトス加減ならこうしなきゃいけない」と考えているところを、自分が勝手に判断してやってたと思うんですね。そういうのが、今回は改めて感じられましたし、考える、突き詰めるというのは、究極は感覚になるのかなと感じました。

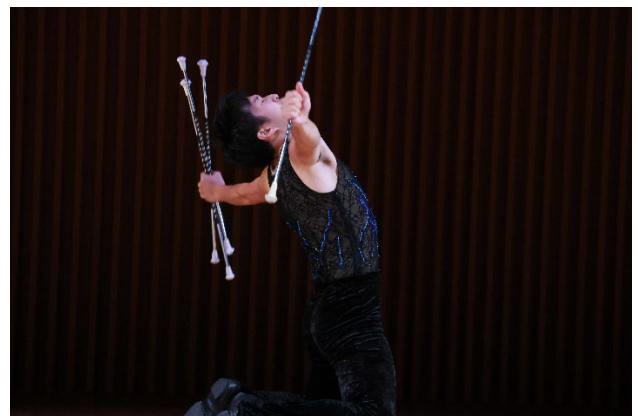
ア：ジャグラーも演技する上で、やっぱりミスを減らすことを考えるので、すごく参考になると思います。

ま：照明を普段使うことはありますか？

石：いや、照明は詳しくなくて。今回もバトンが見えたらいいですという思いで、ほんのり青色とか、それくらいの気持ちでスタッフさんをお願いして。スタッフさんも気を利かせてくれて「こういう青はどうですか？」「この強さはどうですか？」と対応してくれたおかげで、今回のゲストステージが出来上がりました。もっとこだわったら、バトンのいい魅せ方とかあると思うんですよ。ただ、本当に僕自身が競技者としてやっていることが多くて、作品を作るとか、自分自身がスポットを浴びてなにかをすることが少なかったんで、今回はこだわらずに「バトンさえ見えればそれでいいです」「技術で魅せたいです」みたいな感じでした (笑)。

ま：でも、それがすごくシンプルというか。凝りすぎずキレイに見える照明でよかったなと思います。

石：ありがとうございます。今回はお客さん目線でやりたいというのがあったので、本当にシンプルでよかったと思います。



バトンと競技人生について

ま：バトンはいつから始めましたか。

石：親曰く、3歳です。自分の母親がバトン教室を開くことになったんですけど、まずバトンは触らず体操だけするメンバーとして、数合わせとして入れられたというか（笑）。小学生になって物心がついたら、周りは全然バトンやってないぞと気が付いて。「男の子はみんなサッカーとか野球をやっている中、なんで僕は女性の方に囲まれてバトンをやっているんだろう」みたいな問題意識が出てきて、やめたいと思う時期もありました。

ただ、それを乗り越えたきっかけがあって。とあるバトンの発表会に、すごいかっこよくバトンを回すお兄さんがいて、めちゃめちゃ上手だったんですね。それが刺さったんですよ。一方で僕は同じ条件下でバトンをやっていて、すごいやめたいって言うてる。なんで僕はこんな状態なんだろう、と感じてそのお兄さんを憧れにして、めちゃくちゃ練習するようになったんですね。それから小学校4年生のときです。なので、3歳からやってはいたんですけど、それまでバトンを投げるのもままならないくらいの技術の低さでした。小学校4年生の発表会をきっかりに練習し始めたのが、僕の始まりです。

ま：競技の世界に進んだのも同じ頃ですか。

石：そうですね、小学4年生になってすぐオーディションを受けて、クラブチームで厳しい指導を受けながら、自主練習して大会にも出場するようになりました。

ま：一度は競技から引退されていたよね。

石：2019年に学校に就職して切羽詰まっている中、8月の世界大会に向けて練習もしないといけなくて、精神的にも身体的にも厳しいところがあって、なんとか世界大会を優勝できるところまで持っていっただんですけど、このまま続けるのはしんどいなと感じました。だからこれを機に、後進の育成に移って現役を引退しようと思ったんです。

ア：就職前は、バトンを続けるかどうか考えていましたか。

石：就職する前の3月に世界大会の予選でもある全日本選手権があり、僕の気持的にはもうそこで終わりのつもりでした。

バトンにはグランドチャンピオンという称号があるんですよ。それは大会の部門別の各1位が全審査員の前で大きい会場の真ん中でポツンと踊って、最終的にこの人が本当の1位だ！というのを決めるんですね。それをグランプリ戦というんですけど、そこで優勝した人が日本で3バトンが一番上手いグランドチャンピオンという称号が貰えるんですね。僕自身がその称号を貰うことにすごく価値を感じていて、最後にグランドチャンピオンになって終わりたいと思っていたんですよ。ただもちろん、グランドチャンピオンを獲得したら、世界大会にも推薦されるじゃないですか。大会に出場しないという決断もなかなかできない。でもやっぱり推薦された以上は精一杯やりたいと思って、教員との両立のなかで、なんとか調整してやったという感じでした。

ま：競技に復帰しようと思ったきっかけを教えてください。

石：：根本は、僕が選手ではなくなったので、大会を支える側に立つことが多くなって、第三者の目線で競技を見ることができたんですよ。そうすると、僕自身が競技していたときと見え方が違うと感じたんです。見ていくなかで、「もっとこうしたら面白くなるのにな」と考えちゃったんですよ。見る度にアイデアがどんどん降ってきて、これを形にしたいと思うようになりました。3バトンは発展途上で、ジャグリングの世界を見ていると、ものすごくたくさん面白い技術や難易度が高い技術があると感じていて。そういうのを見ている分、バトンの演技に可能性を感じて、自分で表現してみたい気持ちが出てきたので、4年ぶりに現役の復活を決めました。

ま：それで優勝と...おめでとうございます。

石：大会の演技では体操の技を取り入れないという、とても挑戦的なことをやりました。僕自身の体力的な問題もあるんですが、バトンの技術だけでどう評価されるのかを試してみたかったんですね。いわゆるジャグリングでやっているような技にバトンの良さを入れながら、技術や空間、タイミングなどでどういう風に評価してもらえるのかな、と。

評価はかなり割れました。10点満点のうち、全日本選手権が一番高い人で9.69点が出たんですね。今までこんな高い点数は獲ったことなかったの、すごく評価してくれたんだなと。ただ、審査員が五人いるなかで、一番下か約8.3点と1.3点の差があって、評価はバラバラなんだなと思いました。しかも五人全員が違う点数だったんですね。逆に言えば、ちゃんと挑戦的な表現、意見が割れるような革新的なことができて自信にも繋がりました。

おかげさまで、イギリスの大会にも推薦してもらって、世界ではどうやって評価されるのか、となったときに、みんな同じような点数が出たんですよ。やってよかったなと思いました。この演技が面白いという人が増えたら、3バトンの考え方もちょっとずつ変わってくるのかな、と。結果的に今回出場してよかったなという感じでした。



仕事と練習の両立について

ま：今は教員の仕事とバトンをどのように両立されているんですか？

石：練習時間を確保するのが難しかったんですが、2022年7月に練習を始めました。しばらく遊び程度でしかバトンに触れていなかったの、大会に向けて練習をしようというモチベーションがまず出てきませんでした。勉強でも一緒かもしれないですけど、机に向かってみるくらいの感覚で、まず体育館に行ってバトンに触ってみようみたいな感じで取り掛かりました。そこから振付を始めて、週に1回だった練習が2回、3回になり、段々練習しない日がちょっと気持ち悪いようになってきて週5回になったり。という感じで、ちょっとずつ自分の身体を騙して練習していくような感覚だったんですね。練習を重ねていくなかで時間はやっぱり取れないので、且つ体力的にも四年って結構長くて、体力も落ちてるんですね。なので、そここの戦いだったんですけど。例えば4年前、一日2、3時間が普通だった練習時間が、今では普通じゃないんですね。だから、短くて一日10分から15分くらい、体力が持つときは1時間と、自分の身体と相談しながら練習時間を短くしました。時間によって練習方法を変えてやっていて、自分の身体に抗わないように練習しました。自分の身体を騙して体育館に連れて行ったのは抗ったんですけど（笑）。練習する内容は身体に素直に進めていくという感じで、なんとか両立していました。嫌なときに練習してもいいものにならないような気がして。

ま：ジャグラーでも、働きながら大会に出場されている方も多いので、かなり参考になると思います。



ア：体力や時間にしても限界があるなかで、練習する上で何を意識していましたか？

石：僕がこだわっているのは、「セクション」、区切りです。一曲を前半と後半で2つに分けています。セクションは分ければ分けるほどセクションは短くなるので、それでノームスするのは楽だと思うんですけど、前半後半でノームスが出来れば、一曲に繋がったときもドロップやミスは少なくできるだろうという考え方で。それと、前半を3回連続でノームスしたら、後半もノームス連続3回行う。その連続3回目って、ものすごく緊張するんですよ。落としてしまったらまた1からやり直した、という緊張感が、大会の緊張感と似ていると考えていて。しんどいけど繰り返して、ノームスに繋がっていくという練習をしていました。ただ、そこに持っていくためには、やっぱり1曲通す体力が必要じゃないですか。なので、振付が完成した段階で、集中力が持つときに通しをしまくる日を作るんですよ。落としてもいいからひたすら通す日を作って、今の自分の状況を把握しています。そこから少しずつドロップ数を減らそうと練習していくと、結果15分しか集中が持たないときに、セクションをそれぞれ1回ずつノームスしたら通しをやって帰ろうという日が作れるんですね。体力ができてしまえば、そこまでの過程がすごく大変なんですけど、15分という限られた時間のなかでも、技練習をあまりせずにセクションや通し練習だけでまとめることができ、成果を出せる練習に繋がると思って練習していました。

ア：まばらに練習したらしんどいけど、分割して練習するのは社会人の方ならではの練習方法ですね。学生はたくさん練習時間があるので(笑)。

石：そういう時期でも、絶対にかむしやらに練習する期間が必要で。それがあるからこそ、社会人に生きてくるというもありますし。

ア：学生と同じようには練習できないから、シフトチェンジがすごく大切ですよな。

石：僕もすごくそう思います。

JJF について

ま：JJFに参加するのは初めてですか。

石：2018年のCS、GSに参加しています。すごく衝撃を受けて、ジャグリングのレベルって高いなと思いました(笑)。特に谷岡海人さん(注2)を観たときに衝撃が走るものがあって、これをバトンに活かさないわけかと思いましたね。あと、いろんな場所でワークショップや練習の交流があるというのはバトンにはない文化なので、面白いと思うことばかりですね。

ま：先ほど岡本さんのワークショップを受けていたということで、いかがでしたか。

石：面白かったですね。自分自身が考えていた部分ではあるんですけど、それをものすごく細かく言語化されているので、長い年月をかけながら考えたり、ディ

スカッションしてきた人なんだろうなというリスペクトと、言葉ひとつひとつが、追及してきている人の言葉って違うなと噛みしめながら聴いてましたね。勉強になることもたくさんありました。

ま：昨日のCSはご覧になりましたか。

石：画面越しで視聴しました。座席からだと、もしかしたら雰囲気は吞まれて、自分が気疲れしちゃうかなと思って。画面越しで観ても、すごくレベルが高いなと感じました。

ま：出場者で気になった方がいれば聞きたいです。

石：うずさん(注3)とか。X(旧twitter)上で絡みはあったので、かつボールの演技も拝見していたので。今年もすごい技をやっているなあと思いながら見ていました。あとは、マチカネボイマワルさん(注4)も元々交流があったので、今年是这样い風な挑戦をされているんだなと思って観ていました。

ま：以前からジャグラーの方と交流されていましたよね。

石：そうですね。自分が学生の時に関わっていた方が多かったので、声をかけてくださる方も多かったですし、僕から声をかけることも多かったです。その辺は温かくていいところだなと思いました。

ま：結構ジャグラーはSNSとかX大好きなので(笑)。

ア：感想を伝えあったりとか、その技いいねとか。

石：いいですよな。そういう雰囲気はものすごく好きです。

ア：バトンとはやはり雰囲気の違いですか？

石：違いますね。どうしてもお互いの演技に感想を伝え合うみたいなことはなかなか出来なくて。バトンにはバトンの良さがあるし、ジャグリングにはジャグリングの良い文化があって、僕はどちらもすごく好きだなという感じです。

おわりに

ま：最後に、SWJの読者やゲストステージを観てくださった方へのメッセージをお願いします。

石：ジャグリングって広い捉え方をすれば、バトンもジャグリングじゃないですか。道具を扱えばジャグリングですよな。もっとバトンがオープンになって、ジャグリングの技を吸収しつつ、バトンの技も提供しながら、お互いにとって有意義な状況が作れたら、さらに双方の技術が向上して面白い文化ができそうだな、と個人的にはすごく思います。今後も、良い意味でジャグリングと関わっていきたいなと思っています。

ま：ありがとうございました。

注1：マルチメディアパフォーマンスカンパニーRoom Kidsのディレクター・ジャグラー。

JJF2023にてワークショップ「コンセプトから考える演出構成論」を実施。

注2：クラブジャグラー。JJF2018CS 男子個人部門第1位。

注3：松本繭介。ボールジャグラー。JJF2023CS 男子個人部門第2位。

注4：ボイスピナー。JJF2023CS 男子個人部門決勝進出。



インタビュアー：まゆこ、アルジェ

長岡岳大 × めぐみ梨華

ボールジャグリングとディアボロの可能性を探るジャグリングデュオ。各地の芸術祭や大道芸フェスティバルでのパフォーマンス活動を並行しながら、一輪車やスポーツスタッキング等といった異なるジャンルのパフォーマーとコラボレーション映像を制作している長岡岳大。競技からパフォーマンスの世界へ入り、現在イベントや大道芸のフェスティバルなど幅広く活動中のめぐみ梨華。

2人がそれぞれ活動しながら、共同制作した映像作品『ディアボロとボール』が好評を博し、2022年からデュオパフォーマンス活動始める。今回は濱口啓介（ゼロコ）を演出に迎え入れ、新作を上演する。

ゲストインタビュー3

長岡岳大

×

めぐみ梨華

×

濱口啓介

(演出)

濱口啓介（ゼロコ）

パフォーマー・演出家。
フィジカルコメディデュオ「ゼロコ」メンバー、
「ボシロ舎」代表。

暮らしの中に潜む些細な出来事をヒントに、
無言劇やノンバーバルパフォーマンスを創作・
発表している。



ゲストステージの感想

クロ助（以下、ク）：まずは、GSを終えた感想を聞かせてください。

長岡（以下、長）：第一印象は、すごく反応が返ってくるというか。ジャグリングをしてこんなにリアクションが返ってくるのが初めてで、客席の方からとんでもない量のジャグリングへの愛を感じました。自分が観客として舞台を観た時に、ジャグリングやジャンルに対して愛があるなあと感じたりする事はあるのですが、逆のパターンは初めてでした。それがすごく印象に残っています。

ク：観客としては、盛り上げるために拍手をしたという意図もあったと思います。ただ、観ていて自然と拍手が起っていたので、それだけ素晴らしいパフォーマンスだったのだと思います。

長：ありがとうございます。一挙手一投足を観てくれているというか、見逃さないぞ！という心意気をすごく感じていて、やりがいがあって楽しくパフォーマンスさせていただきました。

ク：観客がジャグラーなので、少し反応が違ったということもあったのかもしれませんがね。

長：観てくれているのが嬉しかったです。ジャグラー冥利に尽きるというか。ここを観てくれてありがとう、みたいな気持ちで愛に包まれていました。

めぐみ（以下、め）：ジャグラーの観客が多かったので、ジャグリングをやっていない人に向けたパフォーマンスと反応が違って、面白かったし、嬉しかったです。あと、なにか温かさを感じました。今年はCSと同日開催ということでドキドキだったのですが、楽しくパフォーマンスさせていただいて、とてもありがたかったです。

濱口（以下、濱）：僕は共同演出として関わらせていただきました。僕は元々フィジカルコメディといって、台詞のないコメディ作品を作る者でして。ジャグリングはできないのですが、ジャグリングの祭典ということで、このパフォーマンスが観客に受け入れてもらえるのかドキドキしながら本番を迎えました。本番当日、GSが始まるまで

は、緊張で脇汗をびっしょり掻きながら待っていたんですけど、本番が始まったら純粋にお客さんの一人としてすごく楽しめました。演技中の2人の集中力にもとても驚きました。

ク：「ゼロコ（注1）」など、いろんなところで出演されることがあると思いますが、今回は観ることしかできないから、演出家としては違った感じ方があるのでしょうか。

濱：初めての感覚というか。

長：リハーサル段階で濱口さんが「脇汗すごいわいちゃいました」って言って（笑）。出演しないけどそうなるんだ、と面白いなと思いました。

濱：痺れました（笑）。

長：多分演者より汗掻いてましたよ。

め：私たちよりも（笑）

ク：パフォーマンス側としても、楽しさを感じられたということですね。もちろん観客としても大満足なパフォーマンスでした。

長：すごく楽しかったです。舞台上に出て演技を始めるまでは緊張していたんですけど、迎え入れてくれる感じがあって、「緊張なくていいんだ」「ここはホームなんだな」という感覚に包まれました。



ジャグリングと演出家

ク：ジャグラーは基本的に演出家につけずに1人で演技を作ることが多いので、曲や技、ルーティンの流れなども自分で決めるとしています。今回、濱口さんが演出をされましたが、どのような作り方をされていたのでしょうか。

濱：元々2人の活動があって、僕が関わる前から映像やシアター、ストリートなどいろいろな場で活動されていたので、そこでのルーティンがありました。2人というとお話させていただくにあたって、これまでと違った可能性も広げたいという想いがあることを伺いました。また、僕はこれまでの2人の活動がとても好きだったこともあり、本作に関わらせていただくことになりました。2人の活動があってルーティンや流れがある中で、僕がスパイスという要素として関わらせていただいた、という感じですね。なので、3人で作ったという感じです。

長：ジャグリングというルーティンのベースは、部分部分で既に作ってあったんですけど、大きく見たときの構成で……（考え中）

め：アイデアをもらって、流れもアドバイスをもらったりとか。

長：特に最初の机のシーンは、リアクションだったり、ディアボロが転がってボールで遮るところや、リアクションする・しないなども、まっさらな状態で3人でゼロから作っていきしました。

ク：3人の出会いや演技づくりのきっかけはどのような感じだったのでしょうか。

濱：元々知り合いではありました。最初は、僕が活動している「ポシロ舎（注2）」の催して呼んだアーティストのうちの1組が「長岡岳大 × めぐみ梨華」でした。そこで出会ったのがきっかけですね。

長：そうですね。

濱：そこでは演出としては関わってはいないんですけど、そのあとから少しずつ稽古場に入るようになりました。

ク：演者として、演出が入ったことによって感じたことはありますか？

長：「人間」をすごく感じましたね。今まで僕がやってきたジャグリングは、ジャグリングの現象だけを観てほしいと思う事が多く、道具とそれに必要な身体の動き以外のノイズを極力発生させないようにしていたのですが……。

ク：道具の方に焦点を当てるという感じですか？

長：そうです。道具にフォーカスして、軌道や流れに着目してほしいので、それに不要な身体や表情をなるべく消すようにしていました。要は、ノイズを減らして道具をどう見せるかというアプローチをしてきたんですけど、それは濱口さんが入られると逆で。人間の心と身体でどう遊ぶ、探るというか、ボールが動いたことで、リアクションがどう出るかで面白さを紡いでいく、という印象を受けましたね。

ク：ジャグラーとしてはなかなか気づきにくいところかもしれないです。

長：人間の面白さを探っている人なんだなと、心底思いましたね。



め：フィジカルな部分だけでなく、内面的なところでも見てもらったと思っています。その人にとってちょっと無理な演出だったら、じゃあこうしましょうかと提案してくれたりとか、ジャグリング以外の要素を入れていただいて、さらに演技が広がっていった感じがしました。

ク：濱口さんはパントマイムなど、いわゆる身体を使うことのプロフェッショナルだと思うのですが、意識して演出されましたか？

濱：道具の扱いを魅せることに関して2人はプロなので、僕が介入する意義を探ったときに、人間の心の動きに重きを置いた作品を作ることが大切なかなと思いました。僕はジャグリングのことをたくさん知りませんが、今回の作品のようなアプローチはあまりないと思って、いろいろ提案してみました。

クロ助：3人の意見がぶつかるようなことはありましたか？

長岡：そんなに意見がぶつかった印象はなかったですね。

めぐみ：喧嘩になることはなかったです。意見はお互いにあるって、それをベースにどうやったら成り立っていくかというような話し合いにはなりましたね。

クロ助：お互いに意見を出し合って、さらに良い作品を3人で作り上げていったというような感じでしょか？

濱口：そうですね。例えば、内面的な感情を動かすことは、本来役者がやるようなことで、トレーニングもまた違った難しさがあります。だけど、2人は知らない、やったことのないフィールドでも積極的に取り掛かったり、新たな可能性を探ろう、みたいなポジティブな姿勢をすごく感じました。そのため、僕も「こんなのどうでしょう」と提案したり、お互いにわからない所は「どういうことですか？」と質問しながら進んで行きました。

めぐみ：どういうことですか？は結構ありましたよね。言語が違ったので。

濱口：ジャグラー同士だったら一言でわかることでも、僕がわからなかったりとか。

クロ助：暗黙の了解のようなものが、ジャグラー内でもありますからね。

濱口：そうかもしれないです。「ルーティン」という言葉ひとつでも僕の印象とは全然違いましたし。

めぐみ：たしかに。

濱口：少しずつ今も探りながら勉強合っている、という感じはあります。

ゲストステージの演技について

クロ助：最初の机のパートはどうやって造っていったのでしょうか？

濱口：最初は稽古場で即興的に遊びというか。

めぐみ：なにができるかなあって。

濱口：たまたま机があって、ひとまず道具を転がしてるところから始めました。あまり考え過ぎず、遊び心を大切にしていたように思います。

クロ助：考えるより試してみて、そこで面白いと感じたものを広げていくようなものかもしれないですね。

クロ助：演出のコンセプトがあれば教えていただけないでしょうか。

濱口：これまで2人を動画やライブで観ていて、この2人でしかつけない空気感を演技の端々から感じていました。そういった空気感を壊さずに、むしろ新たなベクトルで広げていくような方向性を、自ずと目指していたと思います。なので、2人がやりにくいと感じる演出はやってほしくないし、自分の中にある可能性を引き出しを開いてもらう感覚で対話しながら作りました。

クロ助：今回のGSで、一番こだわったポイントを教えてください。

長岡：僕が興味深かったのは、机のシーンです。ディアボロが転がってボールでせき止めるという行為も、いわゆるジャグリングではないけどジャグリングを感



じる部分があって。そこにプラスして転がっていくディアボロを止められたことで、それをキャッチしようとしていためぐみ梨華の動きも止まったり、「なんで止めるの!？」と不満げな顔をするといった演者の心情が、表情や身体に表れる。物のエネルギーによって揺れ動く演者の心の振る舞いも含めて、新しいジャグリングの捉え方かもしれないと思って、とても演技して楽しかったです。

めぐみ：私が一番苦労したのは、机のパートでした(笑) 感情を表に出す作業が苦手なのですが、今回トライさせていただき、いろいろアドバイスをもらった、人がいたりジャグリングがあったりして、今回の形に仕上がったと思っています。そして冒頭から無音で最後のルーティンのはじまりまで進行したことも私にとっては1つのチャレンジでした。そこも観てほしいところではあります。でも、なにより無音の緩いパートから音が入って空気が変わって、最後のジャグリングのルーティンに入っていく瞬間が一番のお気に入りポイントです。誰かの演技を観ていても、ギャップがすごく好きで。そういうところにキュンと来てくれる人がいてくれたら嬉しいなと思います。

クロ助：切り替わる場面いいですね。

濱口：たしかに。そこグッとくるっすね。僕は……全部好き(笑)

(一同、笑いが溢れる)

濱口：僕は、痺れるという意味では、最後に暗転、明転したあとにめぐみさんがディアボロをもう1回机から転がして、長岡さんが机の上にボールを置いて遮ろうとするけど成功するというシーンがあったんですけど。あれはどうなるか全員わかっていなくて。

クロ助：あ!なるほど!

長岡：僕は遮るつもりでした(笑)。

めぐみ：私は取るつもりでした(笑)。

濱口：そう、長岡さんは本当に遮るつもりでいて。リハーサルではボールが落ちちゃうときもあったりとか、結構シビアなシーンなんですけど。そのとき、僕はもう流れを知っているので、どうなるどうなる!?って(笑)。それは痺れましたね。楽しかったです。

長岡：本当に悔しかった。決めたかった(笑)。

めぐみ：決めたいって言ってたね(笑)。

濱口：客席から観ると、あー遮られるんだって思っていて。そしたらディアボロが通過していったから。見事でしたね。

長岡：ちょっとすれ違った!と思って(笑)。

クロ助：それを聞くと、だからこそ最後のめぐみさんのあの喜びが出たのだと思いました。

長岡：本物でしたね。

めぐみ：リアルだった(笑)。

濱口：結果によって、リアクションが変わる感じでね。



クロ助：ステージを観た私の感想になるのですが、照明の使い方が上手いと感じました。特に照明で四角形を作ったところが印象的でしたが、どなたのアイデアだったのでしょうか？

濱口：(照明の) 形を四角形に、というのは3人からオーダーしてましたね。結構3人であーだこーだ言った印象がありますね。

めぐみ：照明も「どうしますか？」って割と悩んで (笑)

クロ助：舞台監督の竹内さんの思案もあったのでしょうか？

長岡：そうですね、照明以外にも色々助けていただきました。

クロ助：舞台を使うステージに慣れていないジャグラーの観客たちも、新たな知見を得られたのではないかと思います。技以外の要素も非常に重要だということを変更して感じました。

JJF について

クロ助：CS はご覧になりましたか？

長岡：男子個人部門を観られていないです。

濱口：僕も観られていないですね。

めぐみ：私もモニター越しにディアボロの選手だけは観た、という感じでした。絶対盛り上がっていたんだろな、と思って。観たかったんですけど……！

クロ助：動画のアーカイブがありますので、ぜひそちらの方でもご覧頂ければと思います。

CS 特有の良さのようなものは何か感じましたか？

長岡：観てるとやはりヒリヒリしますね。演者よりも実は観客のほうが緊張しているんじゃないかと思うくらい。落とさないで！という願いがその分強まっています。僕の席の前に審査員もいて、採点を考え込んでいる仕草が見えて、そのエネルギーも伝わってきて。審査員込みでCSを観ているみたい。これ以上観ると、GSに影響が及ぶかと思うくらいのヒリヒリさを感じました。同時に、やはりジャグリングは面白いなと思って観ていました。

クロ助：観ている方も熱くなります。CSでは攻めた技が多いためドロップすることもあります。GSでは、演出の構成上落とせないところもありますよね。そういう意味ではGSの緊張感も相当なものだと思います。

長岡：落としても感情に対しては嘘をつかないようにしようとお互いに話したり、大なり小なり、なにかしらのアクシデントは起こるので、そこは考えて演技しました。

アルジェ：濱口さんへ、ジャグラーに対して気づいた点があれば、お聞かせいただきたいと思います。

濱口：会場の盛り上がり方が本当にすごかったです。「うおおお！」って感じが (笑)。ジャグラーがジャグリングの難しさをすごく理解しているからこそ、より一層盛り上がっていく感じもあって、観客が心躍っている空間にすごく感動しました。2人の演技も、僕が想定している以上のリアクションをいただいて、その興奮を感じました。

クロ助：そういう意味では、手を叩いてリアクションをもらう場面は上手いと思いました。めちゃくちゃ楽しかったです。

長岡：観客の方が演者だと思ってしまうくらいリアクションがすごかったです。改めてジャグリングで繋がっているんだなと演技中に感じました。



今後の展望

クロ助：今後の展望があればお聞かせいただきたいと思います。

長岡：3人での活動予定は今のところありませんが、機会があればまたやりたいという気持ちはあります。

めぐみ：まだちょっとバタバタしてて (笑)。

長岡：9月に開催された豊岡演劇祭 (注3) が終わってから、JJFに向けて制作を進めていたんです。

めぐみ：豊岡とJJFでは内容が全然違っていて。

濱口：短い期間で結構頑張って作ったよね。

長岡：スケジュールがバツバツでした (笑)。

クロ助：個人での展望はありますか？

めぐみ：ジャグリングももちろん好きなのですが、今回演出で関わっていただいた濱口さんの要素や人との関わりで自分の可能性が広がっていくなと思ったので、そういう活動をなにかしら続けていきたいと考えています。

長岡：サーカスの技能がどれだけ日常に寄り添えるのか、ということに興味があって。ライブパフォーマンスや映像など、もっといろんな形でサーカスを出力できたら、より楽しめる人が増えるのではないかと考えています。そういう切り口をこれからも探っていくと思います。

濱口：今回を通して、もっとジャグリングのことを知りたいなと思いました。JJFがとても刺激的な空間で、なんかグッときちゃって。ジャグリング愛が溢れている場に対してすごく興味が湧いたので、ジャグリングのことをもっと勉強していきたいなと思っています。

クロ助：最後に、JJFに来たジャグラーに向けてメッセージをお願いします。

めぐみ：3日間とっぴりジャグリングに浸れる時間や祭典ってなかなかないと思っていて。ジャグリング好きな人が集まって、すごく良い空間ですね。生活や人生の中で時間が流れて、人によっても関わり方が変わってくと思いますが、これからもジャグリングをそれぞれの形で楽しんでもらってほしいのかなと。皆さん、良いジャグリングライフをお送りください。

長岡：僕は2005年のJJF in Osaka が初参加だったのですが、当時は中学生で。もちろんSNSもなくて、インターネットに動画が少しあるくらい。ただCSやGS、参加者の熱気や練習場での交流具合は全然変わってなくて。時代が移り変わっていても、この盛り上がりは変わらず続いてほしいと心から思います。この先も一緒にジャグリングを楽しんでいきましょう。

濱口：JJFの、本当に好きな人が集まっている空間が、すごくハッピーで素敵だなと思って。皆さんのジャグリングを観るのも、これから楽しみにしています。これだけ愛がある空間はなかなかないと思うので。

クロ助：ありがとうございました。

注1：ゼロコ：角谷将視と濱口啓介によるフィジカルコメディデュオ。

注2：ボシロ舎：「暮らしを面白くしていく」をコンセプトに、日常に潜む「おもしろさ」をコソコソ研究し、企画やコンテンツをつくっていくチーム。

注3：豊岡演劇祭：兵庫県豊岡市で開催される、演劇やダンスを中心とした舞台芸術フェスティバル。

インタビュアー：クロ助、アルジェ



ワークショップ一覧



1日目 10月7日

種類	ワークショップ名	講師名
実技	3クラブ リバースアンダージーム&ネックカスケード	たくぞー
座談会、その他	ジャグリング道具自作ブレイクアウト	きぞはる
実技、座学	フラワースティック基礎から応用まで	よつてい
実技	4ボールミルズメス入門	ふじも♪
実技	脱力シガーボックスのススめ	まいやー

2日目 10月8日

種類	ワークショップ名	講師名
実技	Creativity and Improvisation	Bow
実技	はじめてのトリックロープ	松岡 寿典
実技、その他	アイソレ系ジャグラー集合！	関西コンタクトジャグリング交流会
座学、座談会	【SSS2023】サイトスワップシンポジウム2023（第21回）	西野順二
座談会	JJFマスターズの集い2023（第12回）	西野順二
実技	誰でも出来る！フラワースティックマルチコア	こば
実技	クラブバレー体験会	いしかわ
実技、座学	バータックス操作向上2	はが
実技	タットダンスの部屋	ぐるくん
実技	技数倍増化計画	ひろた

3日目 10月9日

種類	ワークショップ名	講師名
実技、撮影	みんなでユニゾンをしよう	長岡岳大×めぐみ梨華
実技	バトンの技術に触れてみる	石川 萌
実技	No beat technique	Bow
実技、座学	2 poi one hand Technique	Bow
実技	Poi passing	Armin and Bow
座学	スタッフ学概論特別講義	クラタクミ
実技	くるくる回そう！ダボクト講座【第二弾】	めりー
その他	Fight Night Combat JJF 2023	いまえD
実技	皿回しジャグリング 初級～中級	古谷正幸（まさやん）
実技	ハットのすゝめ	タネ
実技、座学	レインボースプリング講座～流れる虹のジャグリング～	タニシドリ
座学	コンセプトから考える演出構成論	岡本晃樹



バトンの技術に触れてみる

石川 萌



みんなでユニゾンをしよう

長岡岳大×めぐみ梨華



ゲストワークショップ



Creativity and Improvisation
No beat technique
2 poi one hand Technique

Bow



社会人ジャグラーがジャグリングをしている姿を観測できる「おむにばす公演」。
ルーチンあり、コントあり、なんでもありの1時間。

開催日時：3日目 10:00～11:00 会場：小ホール



イベント紹介1
出張版ほのぼののーの in JFH
美味な、えび

出演者：劇団ギスギスース (utm, クスヒ) / 大住拓輝 / 佐藤太我 / 田邊慎史 / ちきぼ / 牧disk / 松永将汰 / 矢口純

スタッフ：小池良 / ちょいも / 新井涼 / のりc / 棚橋悠 / サクユ / 伊達基起 / 徳永遥杜 / 松田仁

劇団ほのぼののーの X: @hono_vonoeno Webサイト: <https://hono-vonoeno.jimdofree.com>

イベント紹介2 ディアボロチームバトル

開催日時：2日目 13:00～15:00 会場：第3体育室



2位：2年目1年目0年目
3位：チームほっかわ待ち

チーム固定軸ダメ絶対
4ハイ
おされてえらいチーム
久保田さん
チームてんせい
JUK
2年目1年目0年目
絶対にやせ切ってみせる
どんな手を使ってでも。
チームほっかわ待ち



イベント紹介3



World Juggling Federation
(世界ジャグリング連盟)
主催イベント



競技結果

WJF 式ナンバーズ/エンデュランス部門

【クラブ】

- 1 Kento Tanioka
- 2 Masahiro Takahashi
- 3 Iver Tronstad

【ボール】

- 1 Komiken
- 2 Kazuma Kado
- 3 Kotaro Minami

フリースタイル部門

【5ボール】

- 1 Kounoshin Shibata
- 2 Hito
- 3 Kotaro Minami

【6ボール】

- 1 Kotaro Minami
- 2 Hito
- 3 Kyosuke Shimizu

【7ボール】

- 1 Kotaro Minami
- 2 Hito
- 3 Kounoshin Shibata

【5クラブ】

- 1 Kaito Tanioka
- 2 Kento Tanioka
- 3 Masahiro Takahashi

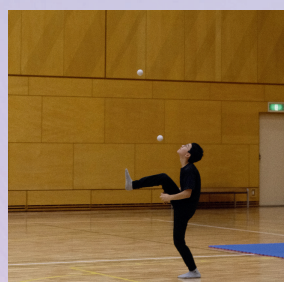
【担当】

World Juggling Federation &
WJF 加盟会員
エイヴィン・ドラグシャ (Eivind Dragsjø)

【翻訳スタッフ】

藤原 拓巳、松田 仁、今枝 柊二

Juggling Carnival in JJF



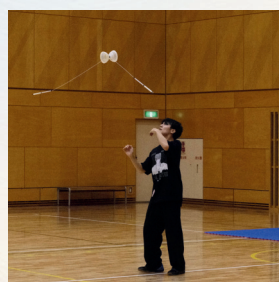
こみけん



みここ



kei



りゅーのすけ



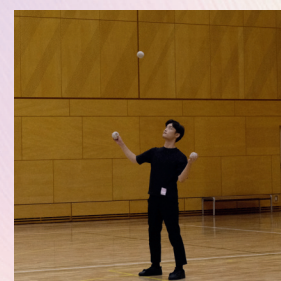
たかゆき



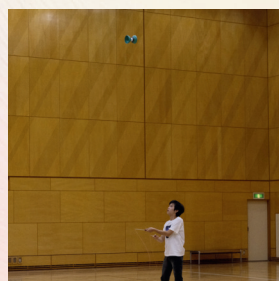
けーすけ



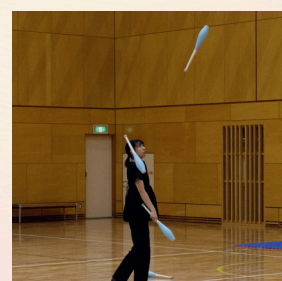
かにかま



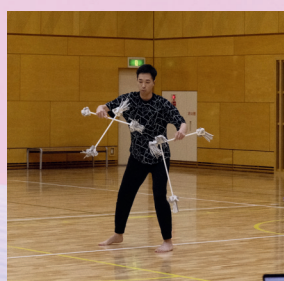
かける



市川 優真



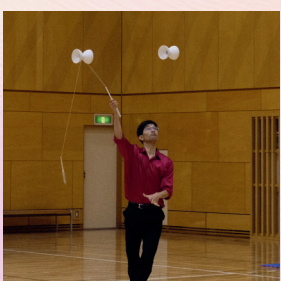
あさぎ



こば



森祐貴



ひかる



高柳



すぎも



utm



前田凌佑



ぐるくん

【担当】
愛知ジャグリング協会
<https://aichijugglingassoc.wixsite.com/my-site>

【運営】
伊藤 康晃

【スタッフ】
けんちゃん、めいこ

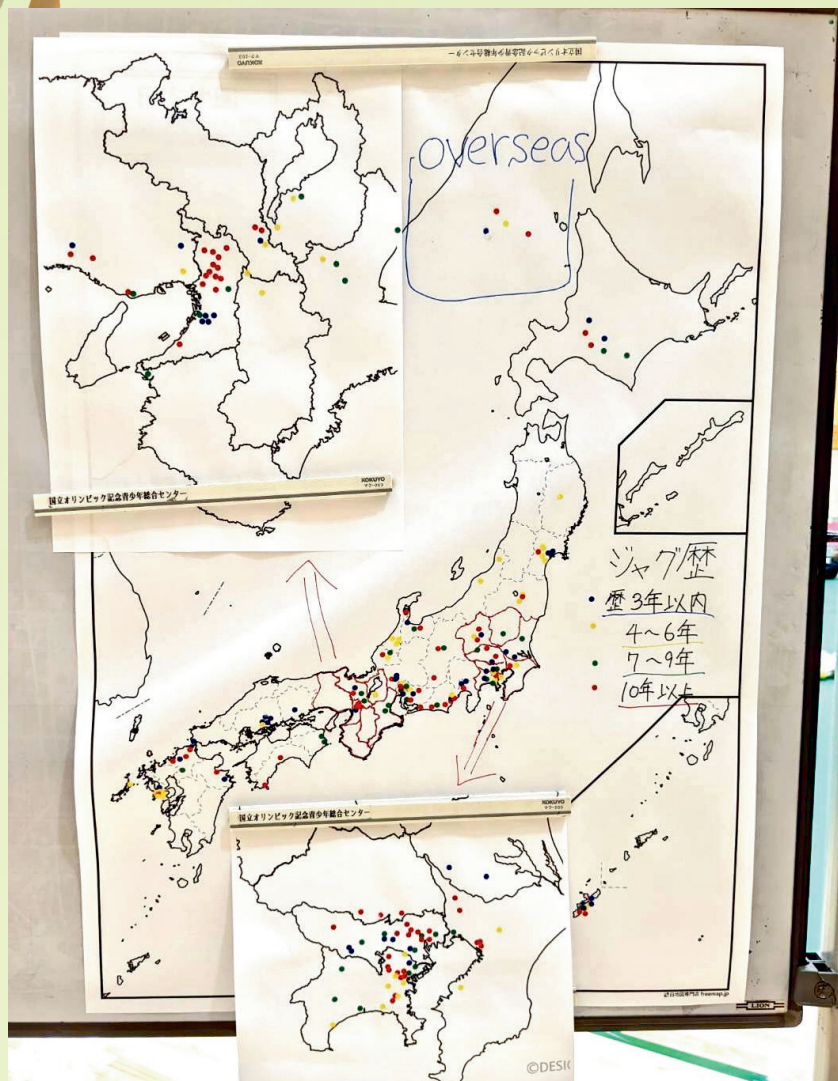
ジャグラー分布図

「JJFに参加しているジャグラーはどこから来ているのか？」

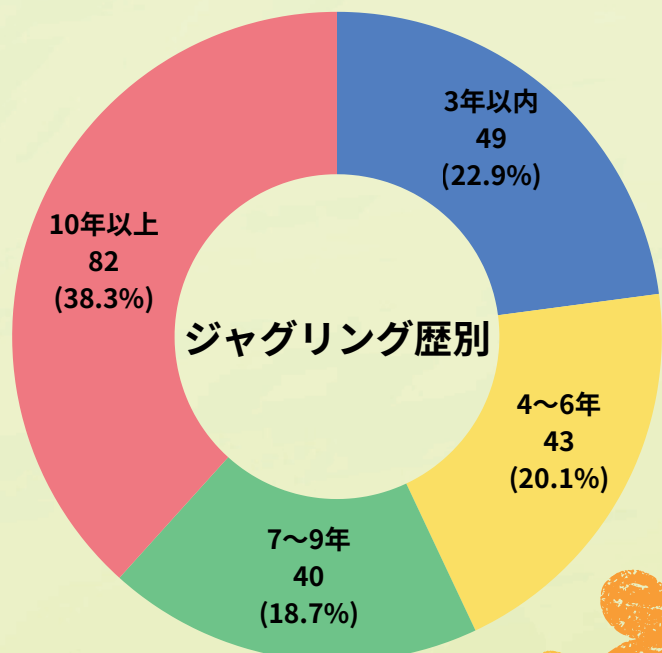
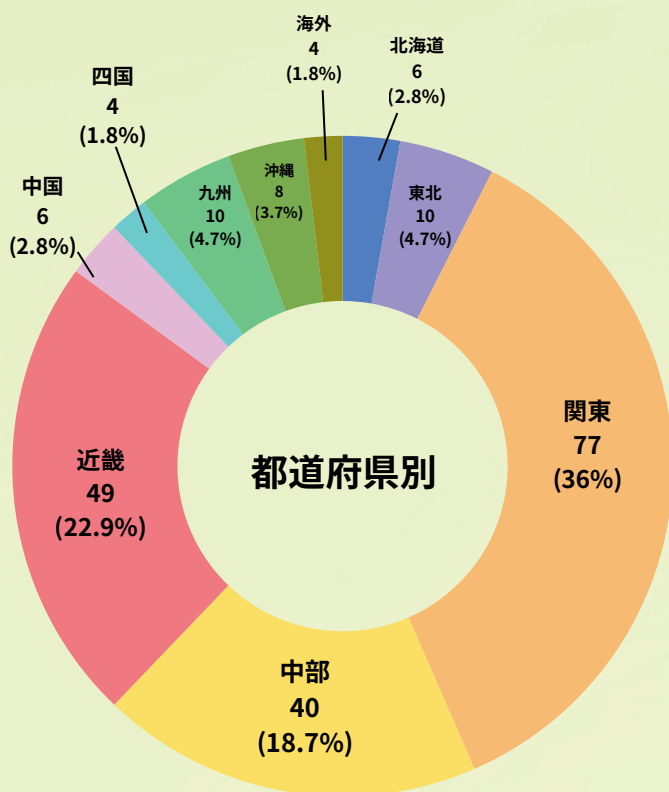
という疑問を解決すべく

白地図へジャグリング歴ごとに色分けしたシールを貼ってもらいました！

※編集部員が手作業で集計したため多少の誤差はお許しください※



シール総数 214枚



北海道地方:北海道
 東北地方:青森県、岩手県、宮城県、秋田県、山形県、福島県
 関東地方:茨城県、栃木県、群馬県、埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県
 中部地方:新潟県、富山県、石川県、福井県、山梨県、長野県、岐阜県、静岡県、愛知県
 近畿地方:三重県、滋賀県、京都府、大阪府、兵庫県、奈良県、和歌山県
 中国地方:鳥取県、島根県、岡山県、広島県、山口県
 四国地方:徳島県、香川県、愛媛県、高知県
 九州地方:福岡県、佐賀県、長崎県、熊本県、大分県、宮崎県、鹿児島県
 沖縄:沖縄県



△編集部員も貼りました

編集後記

編集長 クロ助

SWJ65 号をお読み頂き誠にありがとうございます。編集長のクロ助です。

今回の JJF は編集部業務の他、少し実行委員会にも携わっていたこともあり、各種業務が忙たしい中であつという間に過ぎていったという印象です。とはいいいえ、もちろんジャグリングに交流にイベント参加にと、JJF 自体は心行くまで堪能させてもらいました！来年は実行委員長をしているはずなので、今回同様に皆様に楽しんでもらえるようなイベントにできればと思っています。

さて、今回の SWJ は私が編集長になって 2 冊目の号なのですが、JJF 開催から 1 年以上が開いてからの公開となっていました。今後はもっと早くお届けできるよう、人員強化や業務カイゼンにも努めていきたいと思います。

少しでも早く記事を読みたいという声があることは承知しておりますが、SWJ に限らず日本ジャグリング協会関係者は、本業の合間に各種業務を行っておりますので、その辺りをご配慮いただけますと幸いです。長い目で見たと時に、無理なく継続できる運営体制で進めたいと思っていますので、今後とも何卒宜しくお願い致します。

副編集長 まゆこ

副編集長のまゆこです。

JJF2023 は、諸々の制限も緩和され、ここ数年で一番盛り上がっていた JJF、という印象を受けました。もちろん、私も撮影やインタビューをしながら、大いにイベントを楽しむことができました！

SWJ65 号では、その盛り上がりや熱意を、参加した方にも、参加していない方にも目一杯伝えられるような誌面になったと感じています。

編集部員、そしてご協力いただいた皆様のおかげで無事に発行することができました。ありがとうございました。

今回は姫路開催ということで、東京での JJF しか経験したことがない私は今から緊張しています（笑）

今後とも SWJ をよろしくお願いいたします。



▲SWJ 編集部と JJF 撮影班

編集部員募集中

SWJ 編集部では編集部員を募集中です。

企画・原稿依頼と回収・編集・校正などを行います。主にネット上での作業中心です。

年齢・性別・ジャグリング能力不問です。

ご興味のある方は

shallwejuggle.edit☆gmail.com までお問い合わせください！（☆は@マークに変換してください）

JJF2023 実行委員・スタッフ

●実行委員会

実行委員長・JJF 担当理事	徳川 亮祐
副実行委員長・CS 担当理事	小野口 貴仁
副実行委員長・本部チーフ	世良 京太
本部サブチーフ	勘澤 良介
劇場チーフ	宮田 直人
劇場サブチーフ	齋藤 玲
劇場サブチーフ	あべはるか
イベントチーフ	ハタダ
イベントサブチーフ	熊澤 菜月
広報チーフ	石須 滉大
Web 担当	尾納 宗仁
予算管理担当	クロ助
海外対応	青木 直哉

●本部グループ

チーフ	世良 京太
サブチーフ	勘澤 良介

受付

受付スタッフ	宝田 真拓
受付スタッフ	安永 直央
受付スタッフ	山本 翔太
受付スタッフ	池端 友理
受付スタッフ	猪俣 大志
受付スタッフ	天野 竜也
受付スタッフ	垂水 斗希
受付スタッフ	菅野 夢佳

救護班

感染対策・救護班メイン担当	古谷 正幸 (まさやん)
感染対策・救護班サブ担当	たかはし
救護班	たくていー
救護班	松原 丈二
救護班	スズキ

●劇場 (CS・GS) グループ

チーフ	宮田 直人
サブチーフ	齋藤 玲
サブチーフ	あべはるか

CS 事務局

CS 事務局長	小野口 貴仁
CS 事務局	白水 開
CS 事務局	島岡 詢
CS 事務局	深津 哲也
CS 事務局	福島 美羽

舞台

舞台監督	竹内 正則
舞台監督補佐	武藤 美貴子
司会	福島 千紘

客席

客席スタッフ	ぼたーじゅ
客席スタッフ	宝田 真拓
客席スタッフ	まっちゃん
客席スタッフ	菅沼 千紗
客席スタッフ	和田 海秀
客席スタッフ	石田 純一
客席スタッフ	鈴木 仁
客席スタッフ	尾納 宗仁

オンライン配信

配信チーフ	岡本 晃樹
配信スタッフ	山田 タカマサ
配信スタッフ	関矢 昌宏
配信スタッフ	松前 健司
配信スタッフ	野原 大幹
配信スタッフ	井手 優介
機材協力	空軌軌道
同時視聴配信	三珠さくまる

●イベントグループ

チーフ	ハタダ
サブチーフ	熊澤 菜月

体育館イベント

ジャグリングカーニバル運営	伊藤 康晃
ディアボロバトル運営	齋藤 哲範
1 回生交流会ファシリテーター	ユウ
2 回生交流会ファシリテーター	K
WJF 翻訳スタッフ	藤原 拓巳
WJF 翻訳スタッフ	松田 仁
WJF 翻訳スタッフ	今枝 柊二
エクストリームバトル司会	林 文丸
エクストリームバトルスタッフ	多田 瑞葵
エンデュランス司会	クロ助
エンデュランススタッフ	菅沼 千紗
エンデュランススタッフ	ほとり
エンデュランススタッフ	J

●広報グループ

広報チーフ	石須 滉大
Web 担当	尾納 宗仁

デザイン

ロゴデザイン	まいたけ
フライヤーデザイン	ACO

SWJ

SWJ 編集長	クロ助
SWJ 副編集長	まゆこ
SWJ 副編集長	GAO
SWJ 編集部員	おかっしー
SWJ 編集部員	アルジェ
SWJ 撮影班	みー
SWJ 撮影班	いづな
SWJ 撮影班	KMJ

JJF 紹介動画

撮影・編集	Nexus
	(上田尚弥・堀越俊弘・高橋千夏)

月刊 JJF

撮影・編集	obaty
-------	-------

主催：日本ジャグリング協会

理事長	浦和 新
理事	小野口 貴仁
理事	後藤 猛文
理事	徳川 亮祐
理事	松岡 寿典
監事	米屋 遊
事務局長	クロ助

JJF2024 in HIMEJI

“アクリエひめじ” のいいところ

同一施設内に体育館と劇場を完備



天井高 10m、広さ 1800m²
の屋内練習スペース

約 700 名規模の劇場



併設された屋根付き
屋外練習スペース



新幹線駅から会場まで徒歩 10 分

